

Title	マーシャルの進化経済学にかんする理解：人間研究が重要な意味をもつ
Sub Title	Understanding Marshall's evolutionary economics : the study of humans matters
Author	谷口, 和弘(Taniguchi, Kazuhiro) Labib, Ashraf
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2021
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.64, No.4 (2021. 10) ,p.77- 90
JaLC DOI	
Abstract	われわれは，ミクロ・レベルでの人間進歩とマクロ・レベルでの経済進歩とを結びつけたアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) の進化経済学について検討を加える。マーシャルは，人間の性格の変化と福祉の向上による貧困問題の解決との関係性にかんするミクロ・マクロ連環に焦点をあてた。われわれの見解では，マーシャルは，このミクロ・マクロ連環の理解に向けて生物学的アナロジーを援用することにより，有機的成長という概念を軸に不可逆的な歴史的時間におけるケイパビリティ進化を理解するための人間と環境の共進化論として進化経済学を展開しようと試みたものの，それは未完に終わった。われわれは，ケイパビリティ進化にかんする人間研究をめざしたマーシャルの未完の進化経済学を，彼のビジョン，主題，方法論の観点から検討する。 We examine Alfred Marshall's evolutionary economics that connects human progress at the micro level with economic progress at the macro level. Marshall sheds light on the relationship between change of human character and the resolution of issues of poverty through the enhancement of well-being. In our view, to gain an understanding of capability evolution around the concept of organic growth, he attempts to develop an evolutionary economics as a theory of the coevolution of humans and environments by applying biological analogies to understanding the micro-macro link, although his attempts remain unfulfilled. We would like to examine Marshall's evolutionary economics, which needs to be developed as the study of man regarding capability evolution, in terms of his vision, theme, and methodology.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20211000-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マーシャルの進化経済学にかんする理解

— 人間研究に向けて

Understanding Marshall's Evolutionary Economics: The Study of Man

谷口和弘(Kazuhiro Taniguchi)

アシュラフ・ラビブ(Ashraf Labib)

われわれは、ミクロ・レベルでの人間進歩とマクロ・レベルでの経済進歩とを結びつけたアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) の進化経済学について検討を加える。マーシャルは、人間の性格の変化と福祉の向上による貧困問題の解決との関係性にかんするミクロ・マクロ連環に焦点をあてた。われわれの見解では、マーシャルは、このミクロ・マクロ連環の理解に向けて生物学的アナロジーを援用することにより、有機的成長という概念を軸に不可逆的な歴史的時間におけるケイパビリティ進化を理解するための人間と環境の共進化論として進化経済学を展開しようと試みたものの、それは未完に終わった。われわれは、ケイパビリティ進化にかんする人間研究をめざしたマーシャルの未完の進化経済学を、彼のビジョン、主題、方法論の観点から検討する。

We examine Alfred Marshall's evolutionary economics that connects human progress at the micro level with economic progress at the macro level. Marshall sheds light on the relationship between change of human character and the resolution of issues of poverty through the enhancement of well-being. In our view, to gain an understanding of capability evolution around the concept of organic growth, he attempts to develop an evolutionary economics as a theory of the coevolution of humans and environments by applying biological analogies to understanding the micro-macro link, although his attempts remain unfulfilled. We would like to examine Marshall's evolutionary economics, which needs to be developed as the study of man regarding capability evolution, in terms of his vision, theme, and methodology.

マーシャルの進化経済学にかんする理解

—— 人間研究が重要な意味をもつ ——

谷 口 和 弘*

アシュラフ・ラビブ

<要 約>

われわれは、ミクロ・レベルでの人間進歩とマクロ・レベルでの経済進歩とを結びつけたアルフレッド・マーシャル（Alfred Marshall）の進化経済学について検討を加える。マーシャルは、人間の性格の変化と福祉の向上による貧困問題の解決との関係性にかんするミクロ・マクロ連環に焦点をあてた。われわれの見解では、マーシャルは、このミクロ・マクロ連環の理解に向けて生物学的アナロジーを援用することにより、有機的成長という概念を軸に不可逆的な歴史的時間におけるケイパビリティ進化を理解するための人間と環境の共進化論として進化経済学を展開しようとしたものの、それは未完に終わった。われわれは、ケイパビリティ進化にかんする人間研究をめざしたマーシャルの未完の進化経済学を、彼のビジョン、主題、方法論の観点から検討する。

<キーワード>

進化経済学、有機的成長、ミクロ・マクロ連環、現実主義、功利主義

1. はじめに

われわれは、ミクロ・レベルでの人間進歩とマクロ・レベルでの経済進歩とを結びつけたアルフレッド・マーシャル（Alfred Marshall）の進化経済学——彼の用語法にしたがえば、「経済学の後期段階」（Marshall, 1898: 43）における「経済生物学」（Marshall, 1961: xiv）——について検討を加える。マーシャルが焦点をあてたのは、人間の性格の変化と福祉の向上による貧困問題の解決との関係性を扱う人間と環境のミクロ・マクロ連環であった。われわれの見解では、マーシャルは、このミクロ・マクロ連環の理解に向けて生物学的アナロジーを援用することにより、有機的成長

* 本論文は、慶應義塾学事振興資金による研究成果の一部である。そして、本論文に残されたありうべき過誤は、われわれのものであることをここに明記しておきたい。

という概念を軸に不可逆的な歴史的時間におけるケイパビリティ進化にかんする人間と環境の共進化論として進化経済学を展開する意図をもっていた。しかし、あいにく彼の進化経済学は未完のまま残されている。

われわれは、ケイパビリティ進化にかんする人間研究をめざしたマーシャルの進化経済学を、彼のビジョン、主題、方法論の観点から検討し、進化経済学の発展にかんする歴史的文脈のなかに位置づける。このような試みは、彼の未完の進化経済学を完成に導くうえで不可欠な仕事だと思われる（e.g., Hodgson, 1993）。

第1に、マーシャルのビジョンは、ミクロ・レベルにおける特定の個体にたいする限定的かつ閉鎖的な視点を越えた包括的かつ開放的な視点（e.g., Lawson, 1997, 2019）から、不可逆的な歴史的時間におけるケイパビリティ進化を理解するための進化経済学を構築する点にあった。

第2に、マーシャルの進化経済学の主題は、有機的成長を軸とした人間と環境のミクロ・マクロ連環にかかわるものだった。彼にとって、有機的成長は、要素の相互依存性をともなう質的变化を示唆し、個体の異化と個体間の関係性の統合こそ、人間と自然に共通する有機的成長の一般的なルールであった。

そして第3に、マーシャルの方法論は、現実主義を重視した理論を構築し、その理論をもって現実を解釈する形で演繹と帰納の統合を志向した。さらに彼は、功利主義の哲学を軽視する一方、人類にとって高貴な目標を掲げ、生物学的アナロジーに依拠して「あるがままの人間」（Marshall, 1961: 26）の理解を模索するモラル・サイエンスとしての経済学をめざした。

本論文は、以下のように構成される。すなわち第2節では、進化経済学の歴史的な発展を素描しながら、マーシャルの進化経済学を検討する際の基準となるビジョン、主題、方法論について論じる。第3節では、有機的成長を軸としてケイパビリティ進化の理解を志向するマーシャルのビジョンについて吟味する。第4節では、マーシャルの未完の進化経済学の主題である人間と環境のミクロ・マクロ連環を浮き彫りにし、それが制度を媒介とした人間本性の発展と不確実な環境とを結びつけたものであることを論じる。第5節では、現実主義の重視と功利主義の軽視に特徴づけられるマーシャルの方法論について論じる。そして最後に、結語を述べる。

2. マーシャルのメッカとしての進化経済学の基準

マーシャルは、「経済学者のメッカは経済動学というよりむしろ経済生物学にある」（Marshall, 1961: xiv）と述べた。実際に彼は、生物学の示唆にしたがい、環境が人間の性格の形成にたいして影響を及ぼす点を社会科学の支配的な事実とみなし、人間の意志は、性格を修正しうるのと同じく環境を修正しうるので、「大衆の経済的・道徳的な福祉」（Marshall, 1961: 48）にとって望ましい環境をもたらすのに寄与しうると考えた。そして彼は、人間と環境の相互作用から生じる変化にかかわるこのアイデアを、「人間進歩の可能性にかんする広範かつ有望な見解」（*ibid.*）とよんだ。そして、彼は述べる。すなわち、

化学者が扱う対象は、つねに不変である。しかし、経済学は生物学と同様、内部の性質・構造はもとより外部の形態すらつねに変化し続ける対象を扱う (Marshall, 1961: 772)。

つまりわれわれの見解では、マーシャルのメッカとしての経済生物学は、生物学的アナロジーに依拠しながら変化し続ける対象を研究する点で、進化経済学として位置づけられる。

他方でマーシャルは、生物学のアイデアにもとづいた形式理論が経済分析に適していると考えたものの、実際のところそうした形式理論の構築は、きわめて困難な仕事だった (Nelson, 1995)。とはいえ彼は、困難であるにもかかわらず果敢にも進化経済学の仕事に取り組んだ。だが Thomas (1991) がいうように、その仕事は実質がともなわず約束のまま残されている。

かくして現代の研究者は、未完のまま残されているマーシャルの進化経済学に中身を与えると、いうきわめて困難な仕事に取り組む必要がある。この点にかんして Hodgson (1993) は、進化経済学にかんする過去の努力の歴史的文脈の精査がマーシャルの未完の進化経済学を完成に近づけるだろう、という興味深い示唆を与えた。

そこでわれわれは、ホジソンのこうした示唆にしたがい、マーシャルのいう「経済学者のメッカ」に近づくべく進化経済学の発展を素描しながら、マーシャルの未完の進化経済学の特徴を浮き彫りにする仕事に従事したい。とくに本節では、われわれがそうした作業を進めていく際の基準として採用する、現実世界において研究対象となりうる現象の認識にかかわるビジョン、研究対象として識別・選択された主題、そして主題を分析するための方法の選択にかんする方法論といった3つの要素について議論を掘り下げる。

まず、ビジョンからはじめよう。ジョゼフ・シュンペーター (Joseph Schumpeter) によれば、それは研究対象となるような一連の関連する現象を認識するという前科学的な認知活動である (Schumpeter, 1949)。また、分析的努力のための素材を提供してくれる点で前分析的でもある (Schumpeter, 1954)。だがシュンペーターは、そもそもビジョンは、研究者の社会的立場や所属する階級などに特有のイデオロギーだったと論じる。かくして先入観や価値判断は、ビジョンの設定、ひいては科学の分析的努力にたいして何らかの影響を及ぼしうるといわざるをえない。

研究者は、自分のおかれた特有の境遇・立場にもとづいて世界で生じる多様な現象のなかから何に注力すべきか、何に注力すべきでないかを判断し認識する。その際、シュンペーターのように先入観や価値判断の影響を容認せざるをえないとすれば、ビジョンを介しての主題の設定、ひいては方法論にもとづく分析的努力にたいして何らかの影響が及ぶことを完全には否定できないだろう。

一般的に進化経済学は、新制度派経済学ないし新制度主義とよばれる異端派理論のなかの1つの研究プログラムとして位置づけられる (e.g., Eggertsson, 1990; Hodgson, 1988; Knudsen, 1993; Langlois, 1986; Mäki, 1993)。その中核には、制度進化や技術変化などの長期的な経済変化の動学プロセスの理解に向けた現実主義的なビジョンがあり、長期の場合には、さまざまな変数が変化するため、短期の均衡分析の場合と比べてビジョンの役割がいっそう大きくなるものとみなされる (e.g., Nelson, 1995; Schumpeter, 1954; Winter, 2017)。

そして Langlois (1986) は、新制度主義には3つの共通の主題——すなわち、新古典派経済学の行動仮定の拡張、経済プロセス、そして市場を含む多様な制度——があると論じる。このように、研究プログラムを理解するうえで研究対象となる主題が重要となる。

進化経済学の最も重要な主題の1つは、経済変化である。Nelson (2018) は、経済変化が生じるプロセスを生物進化になぞらえた旧世代の進化経済学者として、マーシャルに加えてシュンペーター、ソースタイン・ヴェブレン (Thorstein Veblen) の名を挙げる。とくにヴェブレンによれば、進化経済学は制度の累積的プロセスにかんする理論であり、思考習慣や知識の変化といったケイパビリティ進化を扱う (Foss, 1998; Hodgson, 1998A; Veblen, 1919/2012)。他方で Winter (2017) は、不確実性の世界における長期的な変化プロセスの理解が進化経済学の中核にあると論じる。経済変化は、ミクロ・レベルの主体とマクロ・レベルの経済システムのあいだに位置するルールとその集合の変化プロセスを意味する (Dopfer *et al.*, 2004)。

この点について、Nelson (2020) は論じる。すなわち、

進化経済学は、企業行動の理論を模索してきたが、その際、たいていの経済行動は合目的的なのだが、とりわけ環境が予測不能な仕方に変化している場合には、主体は自分の最適な行動経路にかんして一般的に限定された理解しかえられない、と認識してきた (1104)。

要するに進化経済学は、限定合理的な人間と変化する環境との相互作用の文脈における経済変化を主題とするものと解される。

とくに進化経済学は、経済主体が世界で生じる物事を予測するケイパビリティ、および確率を正確に計算するケイパビリティをもちえないという意味で、人間の限定合理性を強調する (Nelson and Winter, 2002)。したがってわれわれの見解では、進化経済学は、限定合理的な人間が予測不能かつ不確実な環境で行動するとともに、事象が生起する確率を計算するための基礎をもちえない点に注目する意味では、ケインズのたとみなされる (Keynes, 1936, 1973; Taniguchi and Fruin, 2020)。つまりこのことは、後述するように人間と環境のミクロ・マクロ連環が重要な意味をもつことを示唆する。

そして Knudsen (1993) が論じるように、進化経済学は、限定合理的な経済主体と彼らが発展させるルーティン——すなわち、「規則的かつ予測可能な行動パターン」 (Nelson and Winter, 1982: 14)——の双方を分析単位として採用し、経済変化の動学プロセスにかんする進化論的説明を試みる。そして、生物学における変異に対応しうる多くのイノベーションが概して、生物の遺伝子になぞらえる組織のルーティンの継承におけるエラーとして確率論的に生じるものとみなす。かくして進化経済学は、経済主体の限定合理性を仮定したうえで、ルーティン保持による環境変化への適応プロセス、イノベーションをつうじたルーティン破壊による変化プロセスを扱うといえよう。そして、ルーティンをつうじた獲得形質の遺伝を容認する点でラマルクの要素をもちあわせている。

それでは、進化経済学の方法論の2つの特徴について論じよう。すなわち第1に、進化経済学

は、企業による予測不能な問題にたいするアプローチの仕方に影響を及ぼすルーティンを浮き彫りにするような鑑識理論の構築を志向する。Knudsen (1993) は、鑑識理論というのは、抽象度の高い形式的な新古典派経済学をアドホックな構造やストーリーテリングの力を借りて経験的な文脈への応用を可能にする理論化の一形態だと論じる。それによって、新古典派経済学に欠落した制度や不均衡化プロセスにかんする理解が補われる。

そして第2に、進化経済学者は、経済変化にかかわる特定の現象の因果関係について明確な説明を与えるような形式理論の構築に取り組むようにもなった。Nelson (1995) は、近年では進化経済学の形式理論を開発するための材料がマーシャルの時代と比較してきわめて豊かになった事実を指摘する。

さらにネルソンによれば、進化経済学は、主体があたかも目的関数を最大化しているかのように行動するという仮定 (e.g. Alchian, 1950; Friedman, 1953) を懐疑的にとらえるとともに、マーシャルと同じく生物学的アナロジーに依拠するものの、生物学の進化論的概念を経済学へと単に移植するだけで満足してはならないと考える。この点で新世代の進化経済学者は、生物学的分析を欠いたまま生物学的アナロジーにほぼ終始したマーシャル (Thomas, 1991) よりも一歩進んでいると解されよう。

そこで、形式的な生物学的分析を欠いたマーシャルの生物学的アナロジーの限界を明らかにするために、彼の有名な木と企業のアナロジーにふれておくのが有効だと思われる。すなわち、

近年の巨大株式会社の顕著な発展を経験する以前の企業成長についていえば、一般的に木の成長と同様、しばしば停滞することがあるにせよ、簡単に死をむかえることはない。もはやこうしたルールは普遍的にあてはまるものではないにせよ、多くの産業や事業において依然として成り立っている (Marshall, 1961: 316)。

このように木になぞらえて企業を記述することは、第一次近似としてはそれなりに有効な手続きとみなされるのかもしれない。

しかし、マーシャルの木のアナロジーは、なぜ企業が停滞することがあっても、なかなか死なないのかについての説明を与えてくれるものではない。この点で、たしかにエディス・ペンローズ (Edith Penrose) が論じたように、生物学的アナロジーは「正当な理由を欠いた手続き」 (1952: 809) なのかもしれず、企業が人間の目的を実現するために創造された社会制度であることを覆い隠し、人間の意識的な意思決定を過小評価することにつながってしまうのは否めない。

ここで、1つ注釈を記しておく必要がある。すなわち、理論の経験的な予測力が保証されさえすれば仮定の非現実性はいっさい問題にはならないというフリードマン流のいわゆる F ツイストの方法論 (Samuelson, 1963) に向けられたこの種の批判は、いくらマーシャルが生物学的アナロジーに依存していたとしても、彼にあてはまるものではない。というのもマーシャルは、アルチアンやフリードマンのように非現実的な視点から環境による自然選択をもっぱら強調するのではなく、現実主義に依拠して、意志をもつ多様な人間をとりまく環境変化の文脈において人間

と環境のミクロ・マクロ連環を研究の主題として選択したからである。この点については、後で敷衍しよう。

3. マーシャルの進化経済学のビジョン

経済学において富研究よりも人間研究に相対的な重みづけを与えたマーシャル (Marshall, 1961) は、人間本性の多様性・全体性 (e.g., Marshall, 1885, 1897, 1961) を認識したうえで、人間の性格の変化というミクロ・レベルでの人間進歩、および福祉の向上による貧困問題の解決というマクロ・レベルでの経済進歩の双方——すなわち、人間と環境のミクロ・マクロ連環——を浮き彫りにし、人間研究にもとづくモラル・サイエンスとしての経済学を志向したと解せよう (e.g., Caldari *et al.*, 2020; Loasby, 1989; Taniguchi and Fruin, 2020, 2021; Viner, 1941)。

とくにマーシャルは、このミクロ・マクロ連環の理解に向けて生物学的アナロジーを援用することにより、人間と環境の共進化論として有機的成長を軸とした進化経済学を展開しようと試みた。この点について彼は、「人口、健康、力、知識、能力、そして性格の豊かさの面での人間の成長こそ、われわれの研究すべてが目的とするところにほかならない」(Marshall, 1961: 139) と述べ、「生産における人間の直接的な主体性」(*ibid.*) と「生産主体としての効率性を統治する環境」(*ibid.*) の双方を強調した。

マーシャルは、彼の思想を体系化した『経済学原理』(Marshall, 1961) のなかで有機的成長に言及した。彼にとって、個体の異化と個体間の統合こそ、人間と自然に共通する有機的成長の一般的なルールにほかならないと解される。他方で Metcalfe (2006) の解釈によれば、マーシャルの有機的成長は、経済活動の異化・統合のパターンに加え、その構造が時間をつうじて共進化する仕方にも関係する。つまり、環境における制度や個人の変化に関係する。

かくして、有機的成長を軸としたマーシャルのビジョンは、生物学的アナロジーを援用することで、個体の異化と個体間の統合、および異化した個人と多様な制度の共進化を理解するための進化経済学の構築をめざすものであった、というのがわれわれの主張である。さらにわれわれは、変化がミクロ、マクロといった次元によって異なる速度で生じることはもとより、変化が漸進的かつ累積的に進展していく点が、マーシャルにとって重要だと考える。

この点は、「自然は飛躍せず (*Natura non facit saltum*)」という有名な言葉に集約されたマーシャルの連続性原理の含みに注意を払うとすれば、自明のことだといえるだろう。Nelson and Winter (1982) は、連続性原理を反映したマーシャル的な漸進的变化を支持する立場から、マーシャルの進化経済学が不可逆的な変化のメカニズムとして機能する知識の収益逦増を重視していたと論じる。なるほどわれわれは、変化を駆動する知識を含む多様なケイパビリティの進化が不可逆的な歴史的時間のなかで生じることを看過してはならない。

基本的に進化は、個体群のメンバー間の変異、子が親の形質を継承する連続性、そして適者生存を可能にする自然選択といった要素を必要とする (Hodgson, 1998B)。Nelson (2011) によれば、進化論においては多様性の存在と選択プロセスが強調される。そして進化経済学者は、ある時点

での経済の動きを「経済史という動き続ける映像の1コマ」(Dopfer and Nelson, 2018: 213)として理解する。かくしてわれわれは、進化にかんするこうした基本的なアイデアを勘案したうえで、制度の進化プロセスを統治する生成メカニズムを同定する必要があるうえ、ケイパビリティ進化において不可逆的な歴史が重要な意味をもつことを認識する必要もある(Chandler, 1992; Foss, 1994; Fruin, 1983; Maclean *et al.*, 2017; Marshall, 1897; Suddaby *et al.*, 2020; Winter, 2012)。

有機的成長のビジョンの下、個体の異化と個体間の統合の進展に注目し、不可逆的な歴史的時間における人間と制度の共進化プロセスに目配りしたマーシャルは、現実的な制度の観察・比較を志向し、理論と歴史の良好な関係を模索したといえよう。この点についてわれわれは、後で立ち返るつもりである。

したがってわれわれは、ミクロ・レベルにおける特定の個体——すなわち、個人、企業、産業、政府など——にたいする視点を超えた包括的かつ開放的な視点(e.g., Lawson, 1997, 2019)から、人間と制度の共進化を含意するミクロ・マクロ連環に焦点をあて、不可逆的な歴史的時間におけるケイパビリティ進化を理解することが、有機的成長を軸としたマーシャルのビジョンの要諦だと主張しておこう。

4. マーシャルの進化経済学の主題

マーシャルは、生物学的基礎を確立することによって、マクロ・レベルにおける諸国民の富から、ミクロ・レベルにおける変化し進歩する人間へと主題を転じることができた一方、人間と制度は生物学的法則にしたがうと考えたものの、所与の個体群におけるそれらの相互作用は物理学的法則にしたがう市場の下で展開されるものとみなした(Niman, 1991)。つまりマーシャルは、市場の動きは生物学的法則によって決定づけられるものではないと考えた。

ここでわれわれは、不確実な環境の下での人間の性格・活動の変化や貧困問題の解決を扱い、有機的成長という独自の概念をつうじてケイパビリティの変化プロセスを強調した点で、もちろんマーシャルも進化経済学者とみなされることをあらためて強調しておこう。このことを支持する形で Schumpeter (1941: 237) は、「マーシャルは、経済学が進化論的科学であることを認識した最初の経済学者のうちの1人だった。……そしてとくに、彼が議論の対象として扱うと公言した人間本性は可塑的で、環境変化とともに変化している、という認識を抱いた。……重要なのは、彼が自分の『進化論的精神』を自分の理論の仕事に取り入れたことである」といみじくも述べた。

マーシャルの進化論的精神は、人間の倫理の成長と経済環境との相互依存性というミクロ・マクロ連環に反映されている(Whitaker, 1975)。彼の体系の内部には、そうした精神にもとづく進化経済学とともに、自己利益と合理性を軸とした新古典派経済学という異質なパラダイムが共存し、このことに起因する緊張関係がある種の弁証法的な運動を内生的に生み出すことで、彼の体系を将来的な発展を秘めた壮大なものへと昇華させるのに役立ったという正の評価が成り立ちうる(e.g., Cook, 2009; Martins, 2014; Raffaelli, 2003)。

しかしながら Parsons (1931: 102) は、マーシャルは抽象的かつ非現実的な経済学を回避すべく、

企業や労働の世界で生じる事象との接点を保持しながら、「経済的な欲望とその充足に関連づける形で人間の性格・活動の漸進的な発展の理論」を模索するという非主流派的な試みに取り組んだものの、あいにくその試みは失敗に帰したと述べる。このように、マーシャルの体系における思想の二面性にかんしては、パーソンズを含め批判的な評価（e.g., Hart, 2013; Niman, 1991）が存在するのをもたまた事実である。

ここでわれわれは、マーシャルの体系における弁証法的な運動にかんする成否の評価をさておくとするれば、彼の進化経済学は明らかに未完のまま残されていることをあらためて強調しよう。

そしてもしわれわれは、マーシャルが納得しなかった主流派経済学の経済人モデルのように人間本性を所与とした人間の概念化に満足して立ち止まってしまうとすれば、予測不能な事象や根源的不確実性を含意する変化プロセスの理解に逢着することはできないだろう。実際にマーシャルは、「あるがままの人間を扱う。つまり、抽象的な『経済』人ではなく生身の人間を扱う」（Marshall, 1961: 26-7）ことを重視した。この点は、環境のなかで満たされる欲望のかたまりとしての人間観を否定した Veblen（1919/2012）が主張していたことでもある。

人間の合目的な活動それ自体は進化の結果であって、環境の刺激にたいする機械的な反応の結果ではない（e.g., Felin and Foss, 2011; Hodgson, 1998A; Veblen, 1919/2012）。この点についてわれわれは、あるがままの人間の理解とそのための強固なミクロ的基礎の確立に向けた行動的な現実主義を重視しよう。

マーシャルもヴェブレンと同様、制度経済学者とみされる（e.g., Baumol, 2000; Taniguchi and Fruin, 2021）。この点で重要だと思われるのが、人間と環境のミクロ・マクロ連環への焦点である。マーシャルにとって、ミクロ・レベルでの人間の理解とマクロ・レベルでの不確実な環境の理解との架橋が重要な意味をもっていた。Whitaker（1977）は、マーシャルのビジョンは、個人の性格と環境との多様な相互作用による複雑な進化プロセスの理解にあると論じる。つまりマーシャルの進化経済学にとって、人間と環境の対が重要な意味をもつ。

さらに Martins（2014）が論じるように、マーシャルは、古典派の政治経済学者やカール・マルクス（Karl Marx）と同様、社会構造と個人は存在論的な意味で相互に還元しえないという点に細心の注意を払った。すなわちこの点は、個人が制度を構成する一方、制度によって構成されるという双方向的なミクロ・マクロ連環を含意し、制度経済学の中核をなす（Hodgson, 1993, 2004）。個人と制度とは存在論的に区別される実在であり、互いに一方は他方が存立するための必要条件となっているため、どちらか一方に還元することはできない（Bhaskar, 1978）。

マーシャルは、生活基準を重視した人間の性格の発達を促す活動の科学を構築することで、現実経済における富の蓄積による貧困の解決という経済進歩と、環境変化の文脈での人間の合理性の成長と性格の発達という人間進歩とを結びつけて理解した。そして、ここにマーシャル独自のミクロ・マクロ連環が立ち現れ、この連環に立ち入ることは、モラル・サイエンスとして経済学を前進させるのに不可欠な課題だと主張した。

とくにマーシャルは、有機的成長を軸とした人間と環境のミクロ・マクロ連環に焦点をあて、富研究よりも人間研究に相対的な重きをおいたモラル・サイエンスとしての経済学をめざした。

そして彼は、経済学を構築する過程においては、まず前期段階で物理学志向の新古典派経済学から着手し、次に後期段階では生物学志向の進化経済学へと移行したのだった (Marshall, 1898)。

Caldari (2004) は、富は進歩のための重要な条件だが、富が人間の高貴な生活の発展に向けて活用される場合にのみ進歩は生ずる、とマーシャルが考えていたことを強調する。つまりマーシャルは、功利主義に依拠した富研究から着手し、人間研究を重視したモラル・サイエンスとしての経済学 (たとえば, Caldari *et al.*, 2020; Loasby, 1989; Taniguchi and Fruin, 2020; Viner, 1941) へと徐々に軸足を移していったのではないだろうか。そして、マーシャルの子孫であるケンブリッジ学派は、社会的余剰の分配が人間のケイパビリティの拡張に及ぼす影響にたいする倫理的関心 (Martins, 2021) をいまだ共有し続けているが、こうした倫理的関心の高貴さは、マーシャルに由来するとみることができよう。

実際に Marshall (1875) によれば、倫理の成長にかかわる人間進歩は、不確実な環境との相互作用の文脈で生じる。彼は、倫理の成長を左右する要因として、性格の形成と意志の育成を指摘した。すなわち人間は、環境の諸条件に調和するよう性格をおだやかに形成する一方、さまざまな困難を克服することで強固な意志を育成することが、倫理を成長させるうえで必要となる。マーシャルは、とくに性格の形成を重視した。

したがって、ミクロ・マクロ連環のなかで人間の倫理の成長と経済進歩とのあいだの相互補強的なプロセスを扱うマーシャルの進化経済学において、人間進歩を大きく左右するケイパビリティ進化はその中核をなすものと位置づけられる。かくして彼の進化経済学は、人間と環境のミクロ・マクロ連環の枠組でケイパビリティ進化を扱ったといえよう。

5. マーシャルの進化経済学の方法論

マーシャルは、人間行動の理解に資するあらゆる科学的な方法をうけいれた点で経済学の方法論にかんして貪欲だったといえるかもしれない。実際に彼は、アダム・スミス (Adam Smith) とチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) とのあいだにみられる科学者としての共通の資質を、分析を用いた歴史の解釈と分析を確実にするための歴史の利用の双方、すなわち演繹と帰納を統合した方法論に求め、これを支持した (Marshall, 1892)。

しかし、マーシャルは事実の収集・組み立てのための帰納の方法をより強調したふしがあるという Coase (1975) の留保にも、われわれは目配りしておく必要がある。というのも、マーシャルの「目的は、現実の経済システムの働きについての理解、つまりその働きが工場、街路、そして一般の人々の家庭で観察されるようなシステムについての理解にあった」(1975: 28) というコースの推論を妥当だとみなすためである。さらにコースは続けて、「マーシャル自身、貧困を根絶するだけでなく人間とその生活の質を高めるのにも貢献したいと願ったため、経済学を志した。彼が研究してきた経済システムは具体性をもつのであって、研究室や図書館を離れて観察できるようなシステムという特性を備えていた」(*ibid.*) と論じた。

マーシャルは、けっして演繹的推論にもとづく理論の構築を軽視したわけではないが、彼とそ

の子孫ケンブリッジ学派が現実主義を重視した事実は、ここでのコースによるマーシャル解釈にも反映されている。たしかにマーシャルは、事実を大切に、事実を貪欲に求めた (Groenewegen, 1995)。

現実主義に立脚して現実経済の観察をつうじてさまざまな事実を収集し、科学の力でそれらを理論構築につなげ、その理論をもって現実を解釈するという形で演繹と帰納を統合したのが、マーシャルの方法論である。そして彼は、人間のケイパビリティの拡張という高貴な課題に取り組んだ点で際立っている。

しかしマーシャルの体系は、「経済学は、所与の目的と代替的な用途をもつ希少な手段との関係として人間行動を研究する科学である」(Robbins, 1932: 15) という主流派の経済科学の定義とは整合しないように見える。ロビンズやフリードマンの実証経済学は、検証可能な経験的事実をもっぱら扱い、価値判断や義務論のような人間の倫理を不純物として一掃した。実際に Backhouse (2006) が論じるように、人間の道徳的・心的・身体的健康を強調するマーシャル経済学はロビンズ経済学とは互いにあいいれないのであり、むしろジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill) の流れをくむ古典派経済学との親和性が高い。

しかしこの見解は、ミルが経済学体系の構築にあたって依拠した功利主義の哲学を、マーシャルが全面的に支持したことを意味するものではない点に注意しよう。Keynes (1972) が論じたように、マーシャルは功利主義から逸脱したことはないが、彼にとっての経済問題の解は功利主義計算で求められるものではなく、人間の高貴な能力を行使させるための条件だった。そして、マーシャルの妻メアリー・ペイリー (Mary Paley Marshall) が1873年から1874年のあいだに彼の講義を記したノートから、彼は、測定を強調した点で経済学に大きな影響を及ぼしたジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham) を評価した一方、『経済学原理』の版を重ねるごとに快樂、苦痛といったベンサム概念を軽視するようになったことが判明した (Guillebaud, 1942)。

さらに Black (1990) は、マーシャルとウィリアム・ジェボンズ (William Jevons) とを比較し、前者は歴史進化プロセスに配慮した経済学を志向したのにたいして、後者は利己心と効用といった言葉を用いて功利主義に依拠した経済力学を模索したと論じた。他方で Whitaker (1977) は、「マーシャルは……『進化論の教義にのっとった倫理的信条に向けて』進み出したと公言した。実際に彼は、功利主義を支持するにあたってつねに躊躇し続けたため、彼を功利主義者とみなすには根拠が乏しいように思われる」(195) と述べた。彼らの見解は注意深く、マーシャルを功利主義者とみなすことはできないというものである。

さらに Raffaelli (2003) は、マーシャルの進化経済学は功利主義的人間観を棄却している点でヴェブレンのそれに近いが、人間の心の構成要素を具体的に列挙せず、ルーティン化やイノベーションをとまなう進化メカニズムの抽象化に固執した点でヴェブレンとは異なっていたと論じる。そして、マーシャルの進化経済学が「技術、組織、社会の変化は、人間の知識・活動、および(とりわけ)創造性によってどのように影響されるのか(そして、逆に前者は後者にたいしてどのような影響を及ぼすのか)」(2003: 141) という問題に焦点をあて、制度の役割を浮き彫りにすることを可能にしたことを明らかにした。

むしろわれわれは、マーシャルは功利主義を低く評価したという解釈 (Taniguchi and Fruin, 2020) にしたがう。Raffaelli (2003: 97) によれば、マーシャルは「最低限のことしかいわない点であいまいかつ折衷的」とみなされ、人間本性の合理的側面と倫理的側面とを分離することはできないと考えていたという。そしてマーシャルは、利己心にもとづく功利主義計算より、むしろ熟慮にもとづく集団行動や利他行動を現代経済の主な特徴とした (Collini *et al.*, 1983)。おそらく、彼を原理主義的な功利主義者とみなすのはミスリーディングだが、功利主義的な要素をある程度はもちあわせていたとする折衷的な特徴づけ (O'Brien, 1991) のほうが的を射ているように思われる。

6. 結語

われわれは、マーシャルが環境変化の下での人間の性格の変化と福祉の向上による貧困問題の解決との関係性を反映したミクロ・マクロ連環に焦点をあて、有機的成長という概念を軸に歴史的時間におけるケイバビリティ進化を理解しようと試みたものの、未完のままに終わった彼独自の進化経済学について検討してきた。

Hodgson (2014: 84-5) は、「われわれは社会制度や組織にかんして、これらの内部で働く個人の道徳的動機、およびこれらによる道徳的感情の持続・複製の仕方を認識しなければ、適切な理解をえられないであろう。……われわれは、主として利己的である。しかし同時に道徳的存在でもあり、われわれの倫理的感情・信念は、……他者との相互作用において普遍的な役割をはたしている。このことは、欲望にまみれた現代のビジネスや商業主義の世界においてすらあてはまる」と述べる。

この言明は、企業の文脈における現代版のアダム・スミス問題 (Viner, 1991) を示唆する。Coase (1976) は、『道徳感情論』(Smith, 1759/2009) と『国富論』(Smith, 1776/1994) とのあいだの人間観の不整合性にかかわるこの問題を論じ、共感の役割を認めるスミスの広範な人間観を歪めてきた主流派経済学の工学的アプローチ (Sen, 1987) に譲歩することはなかった。マーシャルのモラル・サイエンスとしての経済学も、人間を倫理から切り離し功利主義計算に還元するのではなく、共感や倫理の成長を認めるスミスの人間観を支持していよう。

この点でわれわれは、スミスやマーシャルの広範な人間観に依拠し、人間研究をさらに発展させることによって、マーシャルの未完の進化経済学を完成させることに貢献できるように思われる。人間研究が重要な意味をもつ。われわれは、この点を強調することで本論文を結びたい。

参 考 文 献

- Alchian, A. A. (1950), 'Uncertainty, evolution, and economic theory,' *Journal of Political Economy*, 58(3), 211-21.
Backhouse, R. E. (2006), 'Sidgwick, Marshall, and the Cambridge school of economics,' *History of Political Economy*, 38(1), 15-44.
Baumol, W. J. (2000), 'What Marshall *didn't* know: on the twentieth century's contributions to economics,' *Quarterly*

- Journal of Economics*, 115(1), 1–44.
- Bhaskar, R. (1978), *A Realist Theory of Science*. Harvester-Wheatsheaf: Brighton.
- Black, R. D. C. (1990), 'Jevons, Marshall, and the utilitarian tradition,' *Scottish Journal of Political Economy*, 37(1), 5–17.
- Caldari, K. (2004), 'Alfred Marshall's idea of progress and sustainable development,' *Journal of the History of Economic Thought*, 26(4), 519–36.
- Caldari, K., Dardi, M., and S. Medema (2020), *Marshall and the Marshallian Heritage: Essays in Honour of Tiziano Raffaelli*. Palgrave Macmillan: London.
- Chandler, A. D. (1992), 'Organizational capabilities and the economic history of the industrial enterprise,' *Journal of Economic Perspectives*, 6(3), 79–100.
- Coase, R. H. (1975), 'Marshall on method,' *Journal of Law and Economics*, 18(1), 25–31.
- Coase, R. H. (1976), 'Adam Smith's view of man,' *Journal of Law and Economics*, 19(3), 529–46.
- Collini, S., Winch, D., and J. Burrow (1983), *That Noble Science of Politics: A Study in Nineteenth-Century Intellectual History*. Cambridge University Press: Cambridge.
- Cook, S. J. (2009), *The Intellectual Foundations of Alfred Marshall's Economic Science*. Cambridge University Press: New York.
- Dopfer, K., Foster, J., and J. Potts (2004), 'Micro-meso-macro,' *Journal of Evolutionary Economics*, 14(3), 263–79.
- Dopfer, K. and R. R. Nelson (2018), 'The evolution of evolutionary economics,' in R. R. Nelson (ed), *Modern Evolutionary Economics: An Overview*. Cambridge University Press: Cambridge, pp. 208–29.
- Eggertsson, T. (1990), *Economic Behavior and Institutions: Principles of Neoinstitutional Economics*. Cambridge University Press: Cambridge.
- Felin, T. and N. J. Foss (2011), 'The endogenous origins of experience, routines, and organizational capabilities: the poverty of stimulus,' *Journal of Institutional Economics*, 7(2), 231–56.
- Foss, N. J. (1994), 'Why transaction cost economics needs evolutionary economics,' *Revue d'économie industrielle*, 68(2), 7–26.
- Foss, N. J. (1998), 'The competence-based approach: Veblenian ideas in the modern theory of the firm,' *Cambridge Journal of Economics*, 22(4), 479–95.
- Friedman, M. (1953), *Essays in Positive Economics*. University of Chicago Press: Chicago.
- Fruin, W. M. (1983), *Kikkoman: Company, Clan and Community*. Harvard University Press: Cambridge, MA.
- Groenewegen, P. D. (1995), *A Soaring Eagle: Alfred Marshall 1842–1924*. Edward Elgar: Aldershot.
- Guillebaud, C. W. (1942), 'The evolution of Marshall's *Principles of Economics*,' *Economic Journal*, 52(208), 330–49.
- Hart, N. (2013), *Alfred Marshall and Modern Economics: Equilibrium Theory and Evolutionary Economics*. Palgrave Macmillan: Hampshire.
- Hodgson, G. M. (1988), *Economics and Institutions: A Manifesto for a Modern Institutional Economics*. Polity Press: Cambridge.
- Hodgson, G. M. (1993), *Economics and Evolution: Bringing Life Back into Economics*. Polity Press: Cambridge.
- Hodgson, G. M. (1998A), 'On the evolution of Thorstein Veblen's evolutionary economics,' *Cambridge Journal of Economics*, 22(4), 415–31.
- Hodgson, G. M. (1998B), 'The approach of institutional economics,' *Journal of Economic Literature*, 36(1), 166–92.
- Hodgson, G. M. (2004), *The Evolution of Institutional Economics: Agency, Structure, and Darwinism in American Institutionalism*. Routledge: London.
- Hodgson, G. M. (2014), 'The evolution of morality and the end of economic man,' *Journal of Evolutionary Economics*, 24(1), 83–106.
- Keynes, J. M. (1936), *The General Theory of Employment, Interest and Money*. Macmillan: London.
- Keynes, J. M. (1972), *Essays in Biography*, in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol. X. Macmillan: London.
- Keynes, J. M. (1973), *The General Theory and After. Part II: Defense and Development*, in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol. XIV. Macmillan: London.
- Knudsen, C. (1993), 'Modelling rationality, institutions, and progresses in economic theory,' in U. Mäki, B. Gustafsson, and C. Knudsen (eds), *Rationality, Institutions, and Economic Methodology*. Routledge: London, pp. 265–99.

- Langlois, R. N. (1986), 'The new institutional economics: an introductory essay,' in R. N. Langlois (ed), *Economics as a Process: Essays in the New Institutional Economics*. Cambridge University Press: Cambridge, pp. 1–25.
- Lawson, T. (1997), *Economics and Reality*. Routledge: London.
- Lawson, T. (2019), *The Nature of Social Reality: Issues in Social Ontology*. Routledge: London.
- Loasby, B. J. (1989), *The Mind and Method of the Economist: A Critical Appraisal of Major Economists in the Twentieth Century*. Edward Elgar: Aldershot.
- Maclean, M., Harvey, C., and S. R. Clegg (2017), 'Organization theory in business and management history: present status and future prospects,' *Business History Review*, 91 (3), 457–81.
- Mäki, U. (1993), 'Economics with institutions: agenda for methodological enquiry,' in U. Mäki, B. Gustafsson, and C. Knudsen (eds), *ibid.*, pp. 3–42.
- Marshall, A. (1875), 'Some features of American industry,' in J. K. Whitaker (ed), *The Early Economic Writings of Alfred Marshall, 1867–1890*, vol. 2, Macmillan: London, pp. 355–77.
- Marshall, A. (1885), 'The present position of economics,' in A. C. Pigou (ed), *Memorials of Alfred Marshall*. Macmillan: London, pp. 152–74.
- Marshall, A. (1892), 'To L. L. Price,' in A. C. Pigou (ed), *ibid.*, pp. 378–9.
- Marshall, A. (1897), 'The old generation of economists and the new,' in A. C. Pigou (ed), *ibid.*, pp. 295–311.
- Marshall, A. (1898), 'Distribution and exchange,' *Economic Journal*, 8 (29), 37–59.
- Marshall, A. (1961), *Principles of Economics*, Text, 9th ed. Macmillan: London.
- Martins, N. O. (2014), *The Cambridge Revival of Political Economy*. Routledge: London.
- Martins, N. O. (2021), 'The Cambridge economic tradition and the distribution of the social surplus,' *Cambridge Journal of Economics*, 45 (2), 225–41.
- Metcalfe, J. S. (2006), 'Evolutionary economics,' in T. Raffaelli, G. Becattini, and M. Dardi (eds), *The Elgar Companion to Alfred Marshall*. Edward Elgar: Cheltenham, pp. 651–7.
- Nelson, R. R. (1995), 'Recent evolutionary theorizing about economic change,' *Journal of Economic Literature*, 33 (1): 48–90.
- Nelson, R. R. (2011), 'The Moon and the Ghetto revisited,' *Science and Public Policy*, 38 (9), 681–90.
- Nelson, R. R. (2018), 'Economics from an evolutionary perspective,' in R. R. Nelson (ed), *ibid.*, pp. 1–34.
- Nelson, R. R. (2020), 'A perspective on the evolution of evolutionary economics,' *Industrial and Corporate Change*, 29 (5), 1101–18.
- Nelson, R. R. and S. G. Winter (1982), *An Evolutionary Theory of Economic Change*. Harvard University Press: Cambridge, MA.
- Nelson, R. R. and S. G. Winter (2002), 'Evolutionary theorizing in economics,' *Journal of Economic Perspectives*, 16 (2), 23–46.
- Niman, N. B. (1991), 'Biological analogies in Marshall's work,' *Journal of the History of Economic Thought*, 13 (1), 19–36.
- O'Brien, D. P. (1991), 'Marshall's work in relation to classical economics,' in J. K. Whitaker (ed), *Centenary Essays on Alfred Marshall*. Cambridge University Press: Cambridge, pp. 127–63.
- Parsons, T. (1931), 'Wants and activities in Marshall,' *Quarterly Journal of Economics*, 46 (1), 101–40.
- Penrose, E. T. (1952), 'Biological analogies in the theory of the firm,' *American Economic Review*, 40 (5): 804–19.
- Raffaelli, T. (2003), *Marshall's Evolutionary Economics*. Routledge: London.
- Robbins, L. (1932), *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*. Macmillan: London.
- Samuelson, P. (1963), 'Problems of methodology: discussion,' *American Economic Review*, 53 (2), 231–6.
- Schumpeter, J. A. (1941), 'Alfred Marshall's *Principles*: a semi-centennial appraisal,' *American Economic Review*, 31 (2): 236–48.
- Schumpeter, J. A. (1949), 'Science and ideology,' *American Economic Review*, 39 (2): 346–59.
- Schumpeter, J. A. (1954), *History of Economic Analysis*. Oxford University Press: New York.
- Sen, A. (1987), *On Ethics and Economics*. Basil Blackwell: Oxford.
- Smith, A. (1759/2009), *The Theory of Moral Sentiments*. Penguin Books: New York.
- Smith, A. (1776/1994), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Random House: New York.
- Suddaby, R., Coraiola, D., Harvey, C., and W. Foster (2020), 'History and the micro-foundations of dynamic capabilities,' *Strategic Management Journal*, 41 (3): 530–56.

- Taniguchi, K. S. and W. M. Fruin (2020), 'A research agenda for institutional economics as a moral science: the Cambridge School in the twenty-first century,' Unpublished draft.
- Thomas, B. (1991), 'Alfred Marshall on economic biology,' *Review of Political Economy*, 3(1), 1-14.
- Veblen, T. (1919/2012), *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays*. Echo: Fairford.
- Viner, J. (1941), 'Marshall's economics, in relation to the man and to his times,' *American Economic Review*, 31(2), 223-35.
- Viner, J. (1991), *Essays on the Intellectual History of Economics*. Princeton University Press: Princeton, NJ.
- Whitaker, J. K. (1975), 'Introduction,' in J. K. Whitaker (ed), *The Early Economic Writings of Alfred Marshall, 1867-1890*, vol. 2. Macmillan: London, pp. 352-5.
- Whitaker, J. K. (1977), 'Some neglected aspects of Alfred Marshall's economic and social thought,' *History of Political Economy*, 9(2), 161-97.
- Winter, S. G. (2012), 'Capabilities: their origins and ancestry,' *Journal of Management Studies*, 49(8), 1402-6.
- Winter, S. G. (2017), 'Pursuing the evolutionary agenda in economics and management research,' *Cambridge Journal of Economics*, 41(3), 721-47.

アシュラフ・ラビブ [ポーツマス大学企業法学部]